

聞き書き 菊永 望

我が道を行く I



1954年 尼鋼争議 構内デモ

発行元 あまがさき共生と自治 21 編纂委員会
連絡先 〒660-0892 尼崎市東難波町 3-19-17 2F
電話 06-6482-0066 ファックス 06-6481-3984

聞き書き 菊永望

立志編

ここの喫茶店は、二階の方がゆつくりできるから、二階で話そうや。

おれはね、日本の現代と戦争、一九四五年八月一五日を境にね、それ以前のおれはどうだったか、戦後、戦争に反対して、労働組合運動をするわけだがどうしてか、一度、話してもいいかなとは思っているんよ。

知覧町菊永村

ぼくが生まれたのは、一九二九年九月二二日、届けが遅れて国民として生まれたのは十一月二二日になっているけどね。場所は、昔の名前で鹿児島県川辺郡知覧町塩屋菊永二五〇三一、今で言うと、九州最南端のJRの終着駅枕崎の三つ手前の薩摩塩屋の駅の北の方になるんや。

菊永という村は、隣の松川村と一緒に、明治維新のときに地租改正に反対してね、西郷が明治政府への反抗を組織したということで、川路警視總監が西郷暗殺を計画する一つの理由になったという説がある。「大西郷全集」にもでてくるけどね。俺がなんぼ言っても、村の者はそんな話は知らんというけどね。あくまで伝説やな。

薩摩半島は、火山灰台地で、田んぼがない。コメが取れないから陸稲やね。上の表面には、開闢岳が爆発したときにできたコラ層と呼ばれる地層があってね。霜が解けるときに固まって、苗も植えられず、水はけも悪いんや。何年かに一度、つるはしや鉄の棒をハンマーでたたいて起こさなければならん。コラ起こしというんやね。

農業は、養蚕、麦を植えて、菜種、さつま芋、たばこ、真夏に大豆を収穫して、一月に蕎麦を収穫してね。当時はお茶はなかったわ。

村に地主と小作とどちらでもない自作農がおってね。

地主は知覧町の範囲を超えて広い土地を持っておって、遠くに田んぼも持っておった。小作は、畑が肥えているかどうか、日当たりの良さあしにもよるが、小作だけではほとんどが食べていけないかった。

ぼくの家は自作農、どういうわけか代々養子が多くてね、じいさんも、ばあさんもよそから来た。土地を少しずつ持つてくるので、広くなって、山林もあつたんや。親父はね、俺も影響を受けたわけだけど、村の役と校区の警防団長と翼賛青年団長をやっとつてね。戦争中は教師なんかよりごつう影響力を持つてるわけやんか。天長節とか必ず学校に来て、校医とか、駐在とかと一緒に

並んで偉そうにすわっとった。耕作してない土地を売って、暮らしの足しにしとったね。仕事もせずに酒を飲んで、そのせいで早死にしてね。兄弟は一人、僕は長男、上に姉が二人おって、二人は赤ん坊の時に死んだが、残り九人は長生きで、この前も姉の葬式で会ったとこや。

尋常小学校から国民学校へ

二年生の時に日中戦争が始まって、六年生の四月に国民学校に学制がかわって、高等科が三年から二年になって、義務教育が一年短くなって八年や。

高等科一年の時、おれは満蒙開拓少年団に応募した。中学入ったら勉強もせんと、毎日、五族協和、大東和共栄圏、日本民族が重細亜を征服するんだって言うてね。大陸には、狼がいて、虎もいて、地平線がどこまでも続いていてとうまいこと言いよる。それでおれが「やりませぬ。一と手を挙げた。」

親は反対できなかったが、じいさんがものすごく怒ってね、おれは長男だったから、先祖代々の畑を捨てて、よその畑を作るのは絶対に許さんと言ってね。それがなくて、大陸に行っていたら、おれは死んでいて、今生きていない。

中学一年生の子供に、そんなんやったよ。

中等科二年の時は、少年航空飛行隊を受験した。家族もじいさんも喜んでね。満蒙開拓少年団の時は反対していて、飛行機乗りだったらいいというのは、おかしいやろ。

冬の寒いときに、鹿兒島まで行って、城山に島津斉彬公を祭った、西郷隆盛や大久保利通の銅像もある照国神社があるんやが、その向いの某立図書館の屋上でね、寒い中で素っ裸になって身体検査を受けてね。

一つは、おれは、前から三番目で背が低かった。身長が足らんかったんやな。もう一つは、医者と言ったんだが「目が悪い」と、飛行機乗りは目が良くないとでらんからな。代数の点数もたらんかったと違うかな。落第して、おれはまた、助かった。

それで一九四四年の四月に、知覧飛行場のすぐ近くの、鹿兒島県立薩南工業学校に入学することになったんや。

陸軍知覧飛行場

薩南工業学校に入ったといっても、毎日毎日教練で勉強はなかったんや。配属の将校、将校付きの下士官、校長、訓導は軍国主義の塊で、威張っていてね。冬の朝、整列する。寒くて手が伸ばせない。バチンと軍刀のさやで殴られて、

痛かったね。こん畜生と思つたね。

学校には武器庫があつて、戦闘で使う三八式歩兵銃、軽機関銃、実弾が置いてあつた。三八式歩兵銃を分解、組み立て、弾込めするのに最初は四十分かかつたが、訓練すると五分でできるようになつて。訓練つて、すごいもんや。

学校の南、坂を上って行くと、知覧飛行場があつてね、毎日学校の行き帰り、回わつたらごつつう遠まわりなんじゃ。前は県道だつたところが飛行場のど真ん中で、そこを突つ切つて通つてたんや。注意されることもなかつたしね。もともと知覧飛行場は、飛行兵の訓練のための実習場として作られたんや。空襲とかある前は、飛行場を通つていると、地上兵の人からちよつと手伝つてくれと言われてね、何ですかつて言つて、よう手伝うた。訓練生の卒業の前かな、海岸線のちよつと外側で実弾訓練をやるんやね。練習機に吹き流しをつけて、機関銃の弾に色を着けてある。練習機が帰つてきたら、吹き流しを拾つて、格納庫に持つてきてくれというんや。吹き流しの穴の色と数で訓練兵の射撃の成績をつけるわけや。

米軍の空襲始まる

四十五年になつたら、それどころではないわね。空襲が始まつたのは三月十六日、俺ははつきり覚えてる。公式には十八日となつてはいるけどね。

朝起きたら、ウオン、ウオンと高音の金属音があたり一面にしているわけね。普段聞いたことのない飛行機の音がものすごいわけ。ところがね、機影が見えない、何十分たつても見えないわけよ。不気味やつたね。しょうがないから友達と二人、学校に行こうかと隣村の小高い丘から見たら、開聞岳と今という南九州市の大野岳という山があるんやが、その間にね、ちよつど夏の蚊柱のように百機以上の飛行機が旋回しておつた。俺が起きた時からやから、一時間以上も動かずにおつたんやね。おそろくね、開聞岳を目印にして、あちこちの空母から飛び立つた飛行機が集合場所にしてたと思うね。俺らが見ているうちに、上の飛行機から蚊柱が崩れるように北に流れていつてね、「来るぞ。一と言つていたら、機影が見えなくなったところからガンガンガン、ウオンウオンウオンとね、爆破音と銃撃音で、これはものすごいぞと思つたね。我々の方にも機だけ飛んできて、操縦上の目が見えるような距離で撃つてきた。その時は怖がる時間もないくらいすぐに飛んでつたけど、あとから、おれは怖かつたね。二機だけだから俺らは助かつたけど、それが空襲の始まりやつた。

三月二十九日が二回目、飛行場がやられてね、地上にあるものは全部破壊された。この日は俺の学校は終業式でね、講堂に入るのに外に並んで待機している時、飛行機の音も何の音もせんのに、上から機関砲の薬きようがバラバラ落

ちてきよった。ウワーと言ってたら、俺の上空をグラマンが飛行場の方に飛んでいった。飛行場の格納庫を狙って、俺らの少し北で撃ったんやな、それでちようど俺らの上に落ちてきたんや。学校と飛行場は、二キロぐらい離れていたかな。

特攻隊

四月一日からは、こんどはこっちの特攻隊が出た。その日俺らは、学校の馬を疎開させるための場所を確保するために大勢で出かけていて、帰ってきて、放課後やったと思う。帰り道、ウアン、ウアンと今度は日本の飛行機のエンジンの音がしているから行ってみると、六、七十機おったんちやうかな、整備の最中やった。婦人会の人たちが机を並べていて、その中に操縦士の人たちが並んでいた。ちよつと歳がいつておつてね、二十歳ぐらいから、二十五、六歳かね。その日は、初めから終いまで見送った。それが第一回目の、初めての知覧からの特攻隊やった。四月の中旬までは、そんなことが毎日続いたね。

四月の中頃、俺らは、薩摩半島への米軍の上陸後の北上に備えた阻止線の穴掘りに泊まり込みで出かけておつた。十日ぐらいして帰ってきて、学校の行き帰りに特攻隊の見送りに行ったら、見送りの婦人会の人の姿がないんやね。整備兵の姿もない。ばらばらで寂しい状態だったね。整備兵の人に聞いたたら、憲兵が「スパイがおるから見送るな。」とうるさいからと教えてくれた。

このころの憲兵は激しかったからね。俺も一度やられそうになった。学校の理科室に爆弾が落ちていて、みんながワアーワアー言いよるから見に行つた。その頃は、天井なんかないしね、屋根に一メートル半ぐらいの穴が開いてて、実験机に爆弾が刺さっている。弾体があるかと思つてのぞいてみたらないからね。破片を引き抜いて、これ俺が家に持って帰るからと、自転車に括り付けた。そしたら、友達がお前を憲兵が呼んでいるぞといつてきた。おれ、憲兵がいややから、お前が持つてつてくれと言つたら、いいぞと言つてね。その頃は何でもすぐ憲兵にわかるんやね、ほんとに。

四月の末には、僕の人生観も、戦争観も変えるようなことが起きた。

僕と同じ時に飛行兵に応募した連中の特攻を見送ったんや。その日、おれは自転車やし、飛行場の中に入らんとまわりを走っていたら、オーイ、オーイと呼ばれて行つたら、人がおらんから、爆弾を積み込むのを手伝つてくれと言われてね。誰と手伝うのかと見たら、二人とも俺よりも弟と見えるような、としかつこうやつたね。爆弾も、最初は機械で装着して落下するようになっていたのを、その時は、番線でぐるぐる巻きにしてね、いつもは細長い、スマートな二百五十キロ爆弾なのに、ずんぐり、むっくりした爆弾で、うすいブルブルの色

をしてね、一番違うのは、二百五十キロ爆弾は細長い棒信管なんやが、三枚ばねのスクリューのようなものがついた信管やった。技術兵は、操縦かんの下あたりに手で、そのころ電動はなかったからね、ジュラルミンに穴をあけていた。ジュラルミンに穴が開いたら、操縦かんからピアノ線を引っ張ってきて、信管の間に通して、つないだんや。整備が終わって、三人と整備兵と基地司令と、俺も含めてね、いよいよ行くということで、みんなで酒盛りをやって、俺は酒は飲まんから最中かなんかもらったと思うわ。終って、「礼！」と言って、東方遙拝して、宮城に向かって最敬礼して、俺らも出ていくときに、司令官が、中佐やったと思うんやが、くどくどと、何度も何度も三人に言いよるんや。操縦かんを前に倒すなという事やね。そればかり言うんだよ。何回も、何回も。そのころ途中の島に不時着して、行っていない人達もだいぶ出てきていたからね。操縦かんを前に倒して、下降しようとしたら爆発する仕掛けやって、助かるために不時着しようとするやつは、爆発させるよということやったわけや。あとで考えたらね、これは日本の軍隊腐ってると思ってたね、こりゃー日本は負けるわとね、軍国少年だった俺が考えたのはそのころやね。

最後の大空中戦

五月五日には、B29八機でね、じゅうたん爆撃があったんやね。その当時、知覧城祉の地下にね、南北にね、トラックが入るようにトンネルを掘ってたね、中で左右に枝別れして、特攻機の修理工場があったんや。この地下工場が攻撃目標やったと思う。俺たちは動員中でみんな助かったんやが、この時はだいぶ死んだと思う。前も、後ろも、爆発と砂煙で真っ黒になってね。知覧工場でも、仕事中で、昼飯時で、即死者はおらんかったが八名が負傷してね、けががもとで、その年のうちにみんな死んだと思う。

五月は爆撃と飛行場の手伝いかな。四月ごろから、本土決戦やいうて、ベテランの飛行兵や、整備兵もね、山口や松山やいうて分散してね、空襲の激しい九州の飛行場からいなくなったんや。それで飛行場の司令官に動員されて、手伝わされてね、明るいうちは米軍の爆撃が激しくて、夕方暗くなるとあちこちからかき集められた特攻機が飛んで来よる。それを山の中に運んで、木の枝をかぶせて隠すんや。それで、次の日暗くなると運び出して出撃するというわけや。そんなことが毎日続いてね。

六月一日か、二日、おれは何も書いてないからね、ただの記憶だけどね、薩摩半島の上で大空中戦があったんやね。それを境に空襲の質も変わってくるんやけどね。最後やね。

僕は校門を出たときね、南の方でえらいピカピカするなと思って、超高空や

ね、ものすごい高いところで全然機影なんか見えへん。その時はまだね、カタカタってね、それとポンポンとね、ポンポンというのは機関砲、カタカタカタは、機関銃っていうのはよくわかっていただけだね。こんなところで練習なんかせんからなと思って。ピカピカはね、上下したり、旋回したりして撃ち合う時に、翼に陽が当たって反射するんやね。そんなのを見たり、聞いたりしながら飛行場に登って行くと、登下校の生徒たちが大勢集まっとった。飛行場の中に入ったら、機だけ北を向いて、ぼんとおいてある。仲間で、「あれ何や」、俺は「匹式戦の疾風やな」言うたら、「いや、あれは紫電改や」と話してて、上ではカタカタ音がしてるし、したらサイドカーで運転手と完全装備した操縦上の人が来て、すぐに北に向けて飛び立っていった。戦場に行っただと思うけど。ちょうどそのころ、上では僕らの真上で広くやつとったね。それからだんだん北の方に移動して行って、そのころからようけい飛行機が落ちてくるんやな。煙はわかるんや。機影は全然わからんけど。そんな高いところから一直線に落ちて山にぶつかるやつとか、西の方に煙を吐きながらいくやつとか、何十分とかかって木の葉みたいに落ちてくるやつとか、いろんな落ち方をずっと見ても、どこのかわからへん。

明くる日、学校に行ったら、教室が騒いでいて昨日撃ち落とされたアメリカの捕虜が警察の前に逮捕されているから見に行こうというんやね。半分ぐらいは見に行つたけど、そんな、武器も持っていない人間を大勢で見ても楽しくもないし、見に行かんかった。六月一日だったか、二日だったかそういうことがあって、きゆうに朝の八時ころから、夜五時か六時ごろまで、敵機の音がないようになった。撃ち落としたのも結構あつたし、捕虜もおつたしね、調子が良くて日本が勝つたかと話してもしてたがね、それを境に、向こうの飛行機が朝から晩までね、入れ替わり立ち替わり、動かれへん。すぐやられる。だから、学校におる時でも、道を歩いてる時でも、上に気をつけんと、自分で見て歩かんと歩かれん状態だね、まったくの戦場になつたね。

薩摩半島の北上決戦

学校もね、四十五年の初めごろからかな、半分が野戦病院になつたからね、校庭の東側に大きな穴を掘って、死体置き場になつておつた。大きい空襲が来たらトラックでね、丸太を運ぶようにそこに死体を運んで来るわけ。特に七月の暑いときなんかね、死体が腐って、においがすごいわけ。あちこちから死体が運ばれてきてね。たとえば、高射砲陣地とかあるやろ、今日ね、敵の飛行機を何機か撃ち落とすやろ、したら明くる日必ずやられるわけ。すり鉢型に穴を掘って、土饅頭みたいにあふたをして、そこに据え付けて撃つわけだけど、そ

ここに確実に落とすし、そのころね、ロケット弾も使ってたんと違うかね、弾の後ろの方がね、破裂するのを何度も見たからね、そうじゃないかと思ってるけどね。夏やからね、一晩もおいたら臭いが、すごいんや。自転車置き場の隣が、死体置き場やったかから、臭くておられへん。戦争いうたら、あんなんや。

七月になると、薩南工業と隣の川辺高校と両方で、学徒戦闘隊を作ることになってね。中馬大佐というのがね、最高責任者できて、二回準備会をやって。一回目は、スカツとしてるの中馬大佐はね、金ぴかの軍服着てね、きちんと鉄かぶとをかぶって、ほんとに隊長らしい格好をしとった。二回目ときは、笑わせるんやね、もお、髪は長いしね、真っ白でね、風が吹けばひるがってね、服もよれよれの服になっとったんや。おそらくね、その間に鹿児島や枕崎、空襲で丸焼けになつたんやと思うわ。着るものもないし、靴は草履はいてるしね、階級章もね、クレヨンで描いているんや。焼けた軍刀は紙を巻いて、森ひもでくくっているんや。こんなんや戦争できるかと思つたね。俺らはやるうとおもつたら、教練は受けてるし、武器庫には三八式歩兵銃と 軽機関銃と置いてあるしね、背のうとか水筒とか、本当に一部隊を編成するものがあるわけや。高等学校、工業学校、武器庫がどこにもあって、そこにちゃんと置いてあるわけ。ところが隊長がそんなんで、本当に歳が言ってるわけよ、七十ぐらいやったかな、これでは戦争できんわと思つたね、さすがの軍国少年のおれでも。教室に帰ってから、おじいちゃん、戦争ごっこにもならんぞと話ししとった。

そしたらすぐ、部隊を作るのはやめて、各駐屯している部隊に配属、配置することになった。同じ学年でも建築科は、行つとつたと違うかね。もう、家には帰らんわけだから、部隊と一緒にやから、そのころ部隊は、全部横穴掘ってね、穴倉生活や。ベトナム戦争と同じ戦術やね。昼は、畑の下でも山の下でも穴を掘って、トンネル作って、広場があるとところに台座を作って狙い撃ちしてね。そういう陣地をあっちこっちにいっぱい作りよるわけ。僕らも配置されたら、そういう作業になったと思うけどね、僕らだけ遅れとって、八月十五日になつてね。

敗戦

八月十五日、僕がはつきり覚えてるのはね、その日は、薩摩半島に配属された一番大きい部隊、丸一部隊というんだけどね、そこへ配属されるときまる日だね、決まれば家に帰れないわけだから、それを聞くために行つてたんや。そしたらなんか重要な発表があるから教職員集まれということで、担任がお前ら騒がんでまっとれと言つて出て行つた。帰つてきて、「今日はこれで帰つていいよ」と言われて、「明日また来いよ、詳しいことは明日言うから」ということで、

そのまま帰った。

ところが帰ったらね、明日来んでもいいと、九月一日に出てこいと人づてに話があって、それでも田舎はそれから大変やったね。負けたら強姦されると女の人が騒ぎだして、山の中に逃げてね。俺の家なんか、姉たちも、おふくろもそんなことはなかったけどね。明くる日になってからそういう騒動があって、だいぶ動揺が激しかったんやね。

俺はあちこちに武器庫があることがわかってたからね。崖とか切り通しにね、ちよつとした横穴をあけてね、草をかぶせて、高さが一メートル、奥行きが、五メートルぐらいでね、小銃弾、機関銃弾、対戦車爆弾がある、もし占領軍が本当に来てね、取られたらあかんと思つて見に行つた。それまではだれもおらんと思つてもね、近づいたら俺の後ろに必ず銃を持った人が見張つておつたのにね、十五日過ぎたら誰もおらん。そういう武器庫なんかでもほつたらかしやね。

二日目ぐらいから、駐屯している部隊は、下剋上いうもんでもない、混乱やね。あっちこっちで酔っ払いがおつてね、みんな五合瓶をもつてるからね、将校や下士官で悪いことしたやつ、追いかけてまわしよるんや。雨降る中で、蒼くなつて逃げ回つてる、そういう混乱がずっと続いたんやね。

おふくろなんかは、畑に出たら上をね、音と頭上げかり気にせんとあかんから仕事が進まんと、怖いと、こぼしとつたね。八月十五日の前は、猫でも、犬でも、馬でも、だいぶ殺されたからね、機銃掃射やるわけよ、アメリカが。近所の人も、何人か死んだからね。俺らなんかでもグラマンに一回、二人おるところを狙い撃ちされたからね。一回は掃討でバラバラと、映画みたいにやられたね。でも当たらんのやね。

敗戦直後はね、B29が陣地のあつたところを低空でね、松の木すれすれで狙つてね、ぼくらもB29のじゅうたん爆撃に会つたことがあるけれど、トーチカは付けてなかつたね、前と後ろには銃座があつたけどね。敗戦後は下に籠みたいなごつついのをつけて、それに機関銃をつけてね、前と後ろ三か所にね、それでね、舐めるようにね、軍隊がまだ解散せんとおるんちゃうかと調べていたんやな。ず！つと、やつとつた、敗戦直後一週間ぐらいかな。

九月にね、枕崎台風でね、俺のところは海岸線から三キロ離れているからね、海岸はだいぶ被害が大きかつたと思うよ。爆発音がしたんやけどね。地震みたいに爆発があちこちで起きたと思う。戦争直後やったからね、海上封鎖した浮遊機雷が流れ着いて、爆発したんちがうかね。三キロ奥でもね、家がガタガタしたぐらいやからね。

当時は情報がないからね。俺の村には電話はなかつた。あるとしても、学校と駐在、医者、大地主、そんなもんかな。ラジオはあちこちにあつて、親戚の

家にもあったが、俺の家にはなかった。親父が電話ひかなあかんと言っているうちに、敗戦になったからね。それと、村が公民館から知らせをする、箱形の有線放送やね。

日本の大本営とか、参謀本部の予測は、南洋でも、中国東北部でもあたらんかったことが多いわけやんか。南九州では、鹿児島全体をカバーするようなところ、東は志布志湾、西は吹上浜、南は俺らのところと、米軍が想定していた上陸地点、オリンピック作戦というんやね、日本軍の予測、分析とあたっていたわけや。他はむちやくちややけど。

敗戦後の学校

戦時中、悪いことをやっつた連中が、ふんぞりかえって残っているわけや。軍刀を持ってないだけでね、同じ軍服着て、戦時中みんな、俺も、殴られてるから、ごっつーわだかまりがあるわけ。

前にも話したが、知覧城というところがある。地下が特攻機の修理工場になつとった。そこに旋盤やボール盤があるから俺らに取りに行けいうわけやな。いらんやるから学校で使う、教材にするいうてね、そんないうて、この間まで特攻機作って、爆弾装備するまで手伝ってたのに。それでな、取りに行つて、コンクリート引いて掘え付けて運転するばかりだったのに、またね、上から「いかん」、言われたんやる。「返しに行け」いうわけや。荷車に乗つけてやね、馬を人が引つ張つて山の中を行くわけやる、みんな怒つてもうてね。俺かていやで。

それからね、奉安殿を破壊せよという通知が来たんやる。うちの学校はね、校庭に大きな穴を掘って、それに無傷で入れて、占領が終わったらそれを取り出して、掘えつけようとしたわけ。それだけの穴を掘れというて、俺らに掘らすわけ。ところがね、学校の近くに川が流れていてね、学校が河川敷にできていたからね、砂利と石のこぶしぐらいの丸い石がね、掘れども掘れども出てきてね、蟻地獄といっしょやね。掘つたら周りからくずれてきて掘られへん。「やめや」というて、ほんとにストライキの寸前までいったんやけどね、学校の方ができないというてね、最後は奉安殿をダイナマイトで粉碎しよった。

勤労動員で関西や北九州に行っていた上級生が、終戦で帰ってきて、みんなガリガリに痩せているんやね。首がひよる長くなってやね、シャツもダブダブになってね、気力もないし、日に色もないし、つやもないしね、上級生が上級生出ないように画然としとった。ところがね、実家で野菜やさつまいもを食べべてね、一か月ぐらいして、みるみるうちに元氣を取り戻してね、三年生がね、同盟休校をやるうと言いだしたんや。軍国主義の教師を追放するんやいうやね。

俺はそんな言葉わからんからね、「同盟休校ってなんや」「ストライキってなんや」ってしつこく聞いたんよ。飛行場が草ぼうぼうになって、そこに三々五々集まってきてね、議論するんやけどね。一年生はもつとわからんかった。一年生は、四月に入ってきて、負けたのは八月だから、親が苦勞して金を作って授業を受けにきたのに、何で授業をことわるんやというて怒りよるわけや。二年生はね、そうでもないからね、「やるか」というクラスと、そんななん面倒やから、教師を引っ張り出して殴ろうやというものもおったね。結局、まとまらんかった。殴ろうと思っても、教師は怖がって学校に出てこんし、殴ることもできへん。

混乱から復興へ

田舎はすぐには大混乱やったね。女の人が疎開したり、おっさん連中は、大切にしてきた牛とか、豚とかを殺してね、焼酎を密造してやね、わあー、わあーというて、やけくそいうかね、占領軍が来たら取られるからね、自分らが先に食ってしまおうと、そういう状況やったね。それでも、内地におった人から順番に、戦地におった人も帰ってきてね。

変わったと思ったのは、小作民のね、集会のエネルギーやね。小作でもいろいろあるからね。自分で土地を持ちながら、余力があれば土地を借りる人もいれば、七割か、丸丸、小作でやってる人たちは、ものすごく生活が厳しいわけ。だから、村のことでもなんでも、それまでは消極的になっとったわな。それが、村の、いまだという公民館やわね、当時はクラブとか、公会堂といった、そういうところで、堂々と農地についての委員会を作って、每晚議論してるわけね。ああいう雰囲気は戦争直後の、農村の雰囲気やね。

選挙でね、自分らにはまだ選挙権はないわけだけど、それまでと全然違うわね。女の人たちがね、言葉の雰囲気言うかね、選挙行く、隣近所連れだつて女の人には選挙行くわけな、初めていくわけや。

空襲で、鹿兒島も、枕崎も焼け野原やってね、学生がね、戦災復興に動員されたんや。

建築科は、枕崎の復興に動員されてね。測量、都市計画から工事まで、枕崎は学生が作った街やで。

俺の行っつのは、大牟田の三井三池炭鉱の宮浦坑の三百坪の切りはで働いたんや、宿舎は山の上クラブの青年会館というところだったけど、そこにね、静電の国鉄の、鉄道の機関士を養成する学校の生徒も来とったね。僕らより、一つか、二つ、上かと思っただけどね。僕らが四十名ぐらい、その人らが五十名ぐらい、そのくらいおったかな。四十六年の一月から、二月初めぐらいだったかね。

卒業試験で、一番できの悪かった俺のクラスが数学でトップになって、建築科の連中がおかしいと騒ぎ出してね。クラス全員でカンニングしたんやが、教師が首謀者が俺や言うてな、学校は、俺を退学にすると言い出したんや。それとね、生徒が喫煙してる所が職員室から見えとつたらしくてな、教師の目の前で喫煙するとは何事だとなつたらしい。そこにも俺がおつたということやったのが、今度はやった連中が俺はいなかったと騒ぎ出して、退学処分を辞めて、卒業証書をやるということになって、ようやく収まったんや。

俺、尼崎、関西に行くという考えは、はじめはなかったんや。北九州に、三菱系の九州採炭株式会社というのがあつてな、そこに決まっとつたんやね、書類も作つて。そやけどね、あれはなんだつたんやと。戦争やね。手を振って見送つて、あの連中は全部死んでしもつたし、俺も中に入つてもおかしくなかつたと思うしね、生きてるものと死んでるもののをいくら考えても、そつから先は考えを深めることは出けへんしね。ただ就職して、年とつたら田舎に帰つてきて老後を過ごすのは安易やと思うてね、だったらどうしたらいいんやと考えて、引っかかりがある時にね、尼崎製鋼の勤労課長がちようと、わざわざ募集に来てくれてね、やっぱり、情報も多いしね、卒業後どう生きるかを考えるなら、関東か、関西かと思つてね、決めたね。

尼崎へ

俺の学校から集団就職みたいにして、十五、六人やったね。半分は新卒のおれたちの学年がね、七、八人、あとはね、戦地から帰つてきて復員軍人とか、工場で働いとつた人たちがこの時期にみんな一度、首になっているからね、その人たち合わせて十五、六人やったね。

そのころ、動員も、徴用工もごちやまぜだったやろ、敗戦までは。それを一回ね、大工場でも全部、首にしたんと違うかな。大量に整理して、あとどうなるかわからんという時やからね、占領軍が来て、どんどん接収されていくわけやから。それで、人が足りんということで新しく雇用してるから、当時は神戸製鋼でも、八幡製鉄でも、どこでも募集があつたんとちがうかな。

尼崎にはね、もっこ丸るいうてね、船で来たね。だって、当時ね、鹿児島を起点として出ていくわけやが、もう、乗られへんのや。四十六年の大牟田の炭鉱行く時でもね、人がぎっしりでね、外から見ても、乗れるはずがない思ったもの。なぜかというとね、朝鮮半島と、満州、中国東北部からは、舞鶴を山心として帰港地になつてたわけ、南洋諸島からの引き上げは、鹿児島がメインやった。だから、ごつた返してもものすごい人やわ。それでなんかいかというとつた時に、関西から来たつた人が、ヤミでね、そのころは、軍隊で駐屯

しとった人の中から、気のきいた人は、鹿児島や、奄美大島や、その他の島から買い出してね、生業にしていた人たちがいっぱいおってね、ヤミがはびこっておったわけや。当時は、船はやられてね、ほとんどないわけよ。そやけどもそういう具合にヤミ船になってるわけ。俺らが乗ったのでも、下はね、何とも言えないような臭いでね、人がぎっしりで、横になれないような状態で、船室は人がいっぱいやったね。こんなところよりも甲板がいいわいうて、上に登ったらね、波が荒かったんかな、牛がつかがれとって、牛のうんちでいっぱいね、波が来たら流されてなくなるわけだけど、寒いしね、波しぶきは来るわな。そんなところで四、五人が、マントかぶってばくちやつてる、ピストルおいてね、西部劇とおんなじや。怖い、こっついなって思ったね。瀬戸内人ったらね、波がそんななくて静かになって、大阪の、桜島の埠頭についてたんよ。大阪に着いたらね、ヤミ屋の人が花見に行こうかといつてね、その後、こんだけの間が泊るところがないからね、ヤミ屋の客の祇園の置屋に一泊してもらって、ヤミ業者が納めたコメで白飯をたらふく食ってね、会社に初めていったのが、次の日かな。四十七年の四月の初めやね。

尼鋼人社、労働組合との出会い

まず受付してね、勤労課行って、「来てくれたか」とちよっと話があつて、それからすぐね、全員を労働組合の事務所に連れてった。そこで俺の印象に残っているのは、「あんた等いいときに来たな。」ってね、そういう言葉だったね。なんでいい時かと思つたら、2・1ストでね、やっぱりあれは公務員共闘だけど、民間がむしろいい影響を受けていたんやな。それまで給料では飯を食えなかつた。仕事は月二十日間ぐらいやろ、あと十日は会社に内緒で稼ぎにいつとった。職制も含めて、よそにいつて、だいたいは中山製鋼なんかやけど、日雇いでいつて食いつないどつた。それがね、2・1ストでね、賃上げ要求して、それが全部通つた、給料が上がつて、飯食えるようになって、「いい時きた」と組合に言われて、それだけを覚えてるね。組合つていいもんだと思つたね。

寮生活やね。五百人近くおつたんちやうか。尼鋼の基地やね。二階建てやけど、何棟あつたかね。今は神戸製鋼のマンション形式の社宅になつとる、国道の大庄中通り、浜田になるかね。俺の職場はね、たった十五人ぐらいでね、東大の工学部卒業したのが、十人ぐらいおつたんかな、阪大が一人、神戸大が一人、そんな連中やつたね。係長が三人、二人が東大で、一人が事務でね、俺は記録係やつた。主な仕事はね、新しい製鋼法、製錬技術の開発、酸素製鋼法の研究にね、ごつつう金を使つたね。それとドイツから来た、継ぎ目のない、シームレスのパイプを作る研究、設備が古かつたのかな、シャフトにプレスで

穴をあけて、押しだしていくんやが、先が割れて、ペケばかりでね。インゴット(地金)に不純物が入っていたかも知れんが、自分とこで作っているわけやから、人のせいにはできんからね。この二つで、会社はだいたいぶ金を使っただん違うかね。課長が引き出されて怒られてね、泣き言行ってくるけど、俺は知らんと言っただね、組合に言ってくれやってね、俺の職場は組合としては強かったけど、仕事はうまいこといかん、「こんなんやったら、会社つぶれるで。」と言った。

労働組合青年部に参加

尼鋼に来てすぐにね、寮の委員をやったってね、どこいっても文化活動は盛んでね、書籍部があつて、貸し本が盛んやったね。やっぱり共産党が活動してたんやるね、左翼作家のね、小林多喜二とか、中野重治、宮本百合子、あんな本が中心にいっぱいあるわけ、その中には、外国のものでは、ちよつとくだけて、シェークスピアとか、チャーホフとか劇作家のものね、本をね、明けても暮れてもよう読んだね。

組合運動はね、おれはおくてなんだよね。戦争のこととか考えて、前から興味はあつたんだけどね。僕はね、そういうきっかけがなくてね、四十九年かな、職場に先輩がおつてね、僕より一つ上だったかな、彼のねいさんか、おぼさんが宝塚の女優でね、本人も文化活動に興味があつて、演劇活動をやった。そのころは組合いも文化活動が盛んだったからね、宝塚との行き来もあつて、組合も自分とこだけじゃなくて、他のところの組合とも付き合があつて、けつこう広い視野をもつとつた。それがね、ぼくにね、「菊さん、青年部の委員を、回りもちでやってくれんか。年かつこうから君しかおらん。」といつてきてね、ヒラの委員やね、レッドページの前の年、それで青年部いったらね、同じような考えの人がたくさんいてね。

青年部は面白かったよ。西宮のヨットハーバー、今でも高級なヨットが並んでるけど、当時は簡単な、ボートに柱があつて、自分で帆を立てるわけやけどね、安く貸してくれて、青年部でよくいったね。夏なんかサマータイムといつて三時に終わるわけやろ。八時まで陽があるから、時間はたっぷりあるし、西宮から須磨ぐらいまで行って、帰ってくる。水もきれいでね、甲子園浜もヨットから水の中の人が見えるぐらいやったね。工場から、夜勤のときなんかみんな飛び込んで泳いどったもんね。ところがな、海の上に油がな、独特の色でね、バニッツと広がって、その上にね、ばい煙のたまがね、二ミリから五ミリくらいかな、油の上をころころ転がって、五十二年ぐらいからかな。

寮と国道の間ぐらいに、喫茶店があつてな、なんて喫茶店やったかな。最初はちがうかつたが中学生のね、かわいい子がおつてね、寮生がいっぱい利用してた。兄貴が二人おつてね、弟はね、俺らと仲間で遊んで、上の兄貴はね、京大生やった。天皇問題でな、野球の投手やつとつて、天皇が来たときにな、投手を何人か集めて、天皇に石を投げるといふことで、彼は捕まらんかったと思ふけど、大勢捕まつてな、釈放されたり、逃げたりした連中が尼崎に逃げてきとつた。結婚申し込んで、おっさんにえらい、怒られてね。

、そんなことをやってるときに、尼鋼の労働組合の上部団体が、全日本金属兵庫支部いうんやが、最盛期は、三菱電機、神戸製鋼、川崎造船、川崎重工とか入つてたね。全国としては、当時の産別会議の御三家やね。その青年部長が辞めることになつてね、「尼から出てくれるか」いわれて、俺は支部の副委員長やったが、それでも誰もおらんから県の青年部長を引き受けた。

マルクス主義との出会い

本を一通り読んでね、経済の本を読みだしたら、全然、わからへん。尼鋼の共産党の指導をした人が、どういうわけか知らんけど、戦後初めて出た「資本論」を、俺に五、六冊持ってきてね。十八ぐらいの時やと思ふわ、ほんとに全然わからへん。それで、川上肇の「経済学入門」を読んでみたんよ。これはもつとわかれへん。そんなときに、俺と同じ青年部の副部長をしていた人がね、二人青年部の副部長がおつたのかな、徳島の大きな文房具屋の息子と聞いたけどね、野田弥三郎さんが来て「賃労働と資本」をテキストにして、経済の話をするから、聞きに行こうつて、誘われてね、名前も知らなかったけど、行つたんや。そこではじめてね、佐藤進、成富健一郎、野田弥三郎とおうたんや。佐藤進は京大やけど、京大に行こうと思つていふけど、どこがいいだろうと相談された覚えがあるから、大学入る前だったと違ふかな。その時初めて会つたんよ。歳も一緒ぐらいやった。

外回りにさせられて、こちらには修理する精密機械工場ないから、故障したメーターを集めてねしよつちゅう東京に行かされるようになってね。東京の丸ノ内の一番いいところに丸ビルがあつて、そのすぐ近くにね、野田弥三郎の家があつた。そこで手続きして寮に泊まつた。そのすぐ近くにね、野田弥三郎の家があつたんや。東京に行つたら俺は必ず野田弥三郎の家に行つて、だべつてね。そしてら必ず野田さんが自分でコーヒーを入れてくれてね。それで東京にいてる時間が多くてね、組合もね、普通の青年部の役員なんか東京なんか行かへんで、俺はしよつちゅう行かされとつた。野田さんは、当時は、共産党の常任やつたわけやけどね、出身は阪神間でね、高校は旧姓の甲南高校、はっきりは聞かなか

つたけど家は大阪ガスの大株主違うかな。経済でも専攻は石炭やから、戦時中は石炭統制会というのがあって、そこにおった官僚や。東大では野球部のエースや、野球ばかりやとつたらしいよ。俺が十九、二十、野田さんが三十二、三違うかな。そんな歳でなかったら、国際主義者団なんか作って、そんな冒険やらへんで。

ジェーン台風

千九百五十年は大変やった、九月三日やね、ジェーン台風がきてね。技術者や、尼崎の偉い人の中ではね、南の堤防が戦前海砂を使ってるからね、台風が来て、大きい波が来たら、堤防が崩れるんちゃうかと、危ないといわれとつたんや。案の定、全部つぶれて、大変やったな。

僕はあの日、非番で寮におったんやけど、風も弱まって会社を見に行こうと見たらね、武庫川の堤防だけは全然崩れてなかったね。日本油脂という会社があつてね、そっちに向かつて堤防を降りて、頭に服を縛って、泳いでいった。油で体がベトベトになってね、港橋というのがあつてね、もう、ない？、神戸製鋼のところを降りてね、運河のところまで来たら、だいぶ潮が引いておつた。それで会社まで行ったら、本事務所は、ちよつと盛り土したうえにたつとるかから水につかてないし、工場の低いところはまだ海水につかててね。僕らの事務所は平屋の小屋みたいなもんでね、水が天井まで来たんやね、床が天井に張り付いて、下に何にもない。みんなはね、平炉の上におつたり、高いところに逃げとつて下には誰もおらん。

企業福祉は、あの頃尼鋼は良かったん違うかな。他で死んだ人も寮に運んできてね、寮に運んだ人が六、七体、会社で流れていた人も三、四体おつてね、寮の俺の部屋が二階にあつて、ちよつとその下に、食堂があつて、すぐ隣に集会室があつてね、そこに遺体を並べとつた。満潮のときは国道を越して北まで水が行きよつたから、俺のところは西やけど、東もやからね、だいぶ死んだと思うよ。住友金属、財閥系の工場は水門しめたら水が全然入ってこん、水にかかるのは、貧乏会社ばかりや、そんな言うとつた。仕事は三交代やから、十時ごろ交替して、そのまま寝る人たちは、一杯飲んで寝るわけ。その呑屋の屋台がずーっとあつたんだよ、その人たちが全滅したわけ、労働者は、あんまりおらへん。

ソンドパージ

五十年六月二十五日にね、朝鮮戦争が始まって、左翼はね、北が攻め込んだ

なんて誰も信じなかったね。来たが南に手を出すわけがない、って言ってね、
だけど、右は信じとったね。俺は、そんな勉強もしてないし、せいぜいアメリカ
の南北戦争ぐらいしか知らんわけだけど、たとえ来たが南進したとしても、
どこでも戦争やって統一しとるんやからね、北が攻めようが南が攻めようが、
同じ国家だから干渉する必要がないという考えだったね。それからレッドパー
ジが起きるわけだけどね。

レッドパージ、共産党支持者の職場からの追放やね。鉄鋼、石炭、電力ね、
だいたいこの三つの基幹産業を中心に民間に広がったのが千九百五十年やけど、
四十九年からだったかな、教育、通信、マスコミ、国家公務員、地方公務員、
これは占領軍が直接、初めの計画からやとるわけ。それを民間に広げるとい
うのは、経営者が進駐軍と掛け合ってやらしたと、むしろ自分たちがやって、
それを占領軍がやったように見せかけたのが真相だけども、当時、僕らには、
全然わからへん。だけでも、経営者が組合にね、これは占領軍の方針でやって
いるんだから、絶対にやらなあかんと、我々経営者には実権がないということ
で組合を説得して追放しているわけや。当時は、大同製鋼、日亜製鋼、尼鋼が
一番結束が強いといわれとって、産別会議でも中心的役割を果たしとって、そ
の中で、大同では杉本氏、尼鋼では鈴木栄ちゃんなんかやられたわけや。
大きい所もね、塚口の三菱電機、神戸製鋼、川崎重工、川崎造船もね、当時は
産別会議に、同じ、金属の組合にはいつとって、そんなかで尼三社が、全国的
にも兵庫支部三社とって、影響力をもつとった。このへんではね、大同製鋼
が一番有名やった。戦前からやってる西川彦吉がおってね、その下に杉本氏が
おったんや。

それでうちはね、尼崎製鋼所の労働組合はちよつと毛色が違っておるんや。
あとの争議のときに、常務取締役で、一番力をもつとった市田惣一というのが
おって、労働組合を作った方やね、神戸にも、神戸製鋼とか川鉄のオルグに行
って、組合を作った。尼崎でも、日亜製鋼も市田が働きかけてつくったからね。
市田の後は山村というのがおってね、争議のときは労働担当の責任者で取締役
やったけどね、長いこと組合長をやつとった。技術部門では、東大組が実際の
仕事も、組合も指導しとったね。俺の職場、十五、六名しかおらんに、十一、
二名が東大組やから、その中では労働組合に文句言うような人は、一人もおら
んかった。組合も技術者と職場、職場の職制と仲が良くて、それで運営してき
た組合やからね、その端に共産党がおって、物分かりのいい共産党員は巻き込
まれてね。職場では、五十年の夏にね、今でいうボーマス、当時は手当と言っ
てたんやけど、冬にはあつても、夏にはなかつたんやね。それで鈴木栄ちゃん
が盆に田舎に帰るのにね、金が要ると言い出してね、鋼管職場やったかな、
ワーッと広がって、あつと期間に全国に広まったんやね。

そんな状況で、レッドパーシが来てね。当時は社会党は支持者がおらんかったね。西尾末広とか、あんな連中が上におる時やからね。戦犯がおるところや言うてね、だれも信用せえへん。共産党にシンパシを持ってる。共産党とは直接関係ない、「赤旗」も読んでないけどね、一番信用できるといふか、そういう雰囲気を持つてている。ところが、レッドパーシになったときね、組合はとりあげへんのか。俺も青年部に出ていたけど、何で組合はレッドパーシを取り上げないんや、反対闘争をやらぬのはおかしいという話が出てね。いよいよ明日、入門拒否、被シンドパーシ者を構内に入れぬいと、身分証も全員に配つてきた。尼鋼では九名やったけど、共産党と関係ない人も入っているわけよ。職場で正義感ていふか、俺と最初に寮で一緒だった人も入っているわけ、その人なんか共産党と関係なかつたね。

共産党尼鋼細胞

レパの後、レパのあとすぐに辞めた人が多かつたんじゃないやるか、レパよりもね、尼鋼の共産党細胞が崩壊状態になつてね、全然動かへん。もつたいないやる、というの青年部におつたらよくわかるけど、社会党と一緒にやろうという話は何にも出てけへん、西尾末広とかの時代やからね。共産党は戦前の獄中組が出てきてね、俺は、入つても、入つてなくとも、何もやつてないのはいつしよやないかと思つてたけどね、世間では、獄中十八年、屈辱せずにはいつてきた英雄やという感じは持つてゐるわけや。俺なんかは違ふよ。佐藤進なんかとそういう話をしてたけどね。そういう共産党でもね、細胞がなかつたら、職場おつたら、ごつちう不便や。考えは違ふで。例えば、十七、八の子に、民青行けという話があるやん。民青行つたらね、歌や踊りは盛んだけでも、政治はね、付き合いに、かならん。あとで、佐藤進と民青を改革しようと言つて、おつきい青い旗を作つてね、俺も会社がだめになつて、血を吐いたりして、佐藤進も京大からドイツに留学して、その話はおじやんになつたけどね。

それで五十年の秋に、「共産党に入るう。」つてね、職場で呼びかけてね、三人で行つたんや。そしたら共産党が査問すると言つてね、「スパイや。」言うやね。「入党もしてないのになんや。おかしいやないか。」つて、言い合ひになつてね、それで向こうが、「成富や野田はスパイや。スパイと付き合い合つて。手を切らんと党に入れん。」と言ふんや。二人は「成富さんをスパイと言うようなところは入らん。」と言つてやめたけど、俺は入つたよ。成富さんは仲間だけど、俺は目的が違うからね。向こうは国際主義者団がスパイというわけだけど、俺はその辺はどうでもいい。しがみついても、尼鋼に細胞を作るといふ目的があるわけだからね。面従腹背でもないけれどね、そのことについては一切口を閉

じてね、何も言わなかった。それで尼崎地区委員会に入り込んでしまった。あとでね共産党から、もともと党に入っていないから関係ないといわれてね。規約上では、上級機関、県委員会の承認がいるんやね。

職場では、党に残っていた人が四人おったかな、レバにおうて、組合の書記で残っていた人、後で労働問題の学者になって本を書いた人、教師になって、神戸の共産党の大物になった人、彼なんかは県委員会の承認を得て、正式な黨員になってたんやね。俺が入ってからみんなに声をかけてね、大所帯になった。歳はね全部俺より上やね、職場の委員をしている人、若くてね、しゃきしゃきしていてね、夜学に言ってる人なんか忙しいのに意識があつたんやね。紹介者が二人おって、地区委員会の承認を得ればいいわけやからね。彼らは、正式な黨員として認められた人も多かったと思うよ。

新中国からのメーデー招待

千九百四十九年の十一月、新中国が建国を宣言して、千九百五十一年だったかな、中国総公会からメーデーの招待状が来たわけよ。ところが、国交がないからね、許可がなければ、渡航できないわけ。国会議員では、甲羅富さんと、もう一人が別のルートで渡ったんやが、労働組合は、行こうというところがなくてね、産別組合も許可がなければ行かないということになってね。兵庫の金属も許可が出ないから行かないと、それやったら青年部で行こうということになってね、代表におれと大同鋼板の青年部の人が行くことになったんよ。非合法で行こうと、漁船を借りてね、

鉄鋼内編

平坂さんは黨員で大物だったんやが、ややこしいんやけどね。レッドパーズのときにね、彼とか、柚木はね、追放されずに残ったんよ。それで一部の連中から猛烈な批判があったわけよ、他人を共産党に入れといて、自分らは追放されんというのは、何か裏取引があるんとか言うてね。そうじゃないんやね。前も言ったやろ、尼鋼の組合というのは、技術者や知識人が組合を作ってきて、代々の組合経験者が経営者になつとつて、その連中が平坂や柚木がいなくなつたら組合が悪くなると、二人を残したんや。

東の関東製鋼、西の大同鋼板言うてな、いよいよ鉄鋼経営者連盟が合理化に手をつけだした、日本の産業構造を一変させるということをやってくることははっきりしてたわけやんか、俺は尼鋼細胞をどうしてもつぶしたくなかったのは、そこなんよ。日本の産業構造は、世間一般でも、組合でもね、戦前の産業構造が、陸軍と海軍が、航空機でも、鉄鋼でもそれぞれに会社作つてね、その下に、ずーっと中小企業ができて、そういう二重構造がそのまま残つとつて、足かせになつて、そこを整理せなあかんというのがまずあつたわけよ。ところが朝鮮戦争が始まつて、また動きだすわけよ、銃弾の鋳物を載せたトラックが、街のあちこちを走り回っているわけ、それで合理化ができなかつたんよ。朝鮮戦争がちよつとおさまつて、不景気が来たときに、鉄鋼独占資本が、目的意識的にやね、強引に首を切つて、荒仕事でやつてきおつた。

それと2・1ストで、当時の日本の労働組合の組織率、結集が戦後最高に達していたわけやな、それが、占領軍の下でつぶされて、朝鮮戦争が始まつて、そこで息を吹き返して、それをすぐまた力で首切りやつて、レッドパーズで抑えられて、今度は産別会議が力を無くする過程で、全日本金属労働組合もね、左翼の牙城みたいなものだったけどガタガタになってね。県レベルで、家電から鉄鋼、金属産業の各組合がそろつていたわけや。例えば三菱電機伊丹工場とか、尼崎精密工業とか、それが大同、日亜、尼鋼の三つだけになってしも

うた。それでも今にしたら大きいんやけどね。産業合理化を迎えても組織が戦えん、そこで尼鋼の組合が結論を出したのは、闘うなら鉄連、多数の鉄鋼労働者を結集する総評の鉄鋼連盟に加盟するということやった。金属を脱退して、鉄連に入る、そして平坂氏がそれを代表して、中央に行つたわけや。俺は平坂氏は正しかったと思う。そうでなければ乗り切れんかったしね。争議の時もね、光とつた。それがごつつう問題になつて、平坂氏に対する批判が、がぁーと出てね。

平坂氏が新婚のときで、竹屋小学校で、共産党の何周年かの集会があつて、執行部ではないけれど、俺も青年部長として執行委員会でたけどね。尼鋼の組合は人がいいよね、共産党は労働者の代表だから挨拶に行こうと言うてね、みんな反対やつたけど、平坂さん、説得してね、それならあんた行つてくれという事で、平坂さんが行つて、お祝いのあいさつを組合としてしたわけや。ところがその晩な、平坂氏のところを襲撃してるわけや。寢床に、糞爆弾投げとる。だれがやったかは知らんよ。俺はその時、尼鋼の共産党細胞の責任者やつたが何も聞いてない。批判が大きくなって、組合に謝りに来たのは杉本氏やけど、杉本氏も何も知らんかつたと思うよ。

尼鋼争議

五十四年の四月十六日、会社が三百八十名の解雇を通告してきて、闘争委員会は、七つかな、六つつかな、平炉、大型、小型、中板、棒鋼、鋼管、全部の工場を完全に占拠したわけね。会社は、ロックアウトしてくるわけね。門を全部閉めて、バリケード作るわけ。その朝、俺会社行つたら、バス通りに百五十メートルぐらい、人がいっぱいおるわけ。たむろしてるわけよ。何もすることなくて、会社側がバリケードを作るのを見ているわけ。俺は、腹くくつて中に入らんとしようないなと思って、といつて、今人つたら衝突になるし、完全にできてからやと不法侵入になつて警察にやられる、というのは、回りに警察が駆けつけていたからね。だからどこがいいと言つたらね、ちようどいいのは、その際やね。バリケード言つても、ちやちなもんやからね、ブルドーザーなんかいらん。そこで俺立つてね、応援に来ていたオルグ団を集めて、俺が言うた時に突入してくれと配置して、バリケード終わつたと思つたときに「一人れ。」と号令掛けて、突入したんよ。中には文句言う人もいたよ。その人らには答えてね、「会社は中に入るなとは言つたけど、職場に行くなとは言つたらん。職場には、私物もあるんやから。」といつてね、それからだれも文句言わんようになって、全工場を占拠して、支配した。それからずーつと六月まで占拠を続けてそれが戦略なんよね、そうじゃなければ、とつづくに、切り崩されている。総評

も、鉄連も、支援してカンパくれたよ。中国総公会もね。平坂氏があとで、日中友好運動やるのも、そのせいだよな。

ああなると活動家が足らんのやね。会社は、組合も知らない、見たこともない連中がいっぱい出てきてね、被解雇者に会社を辞めと切り崩しをやるわけね。親や兄弟を通じて、だからこっちは人が足らんのやね。それで走り回ってる間に、飯言うたら、朝、昼、晩、うどん一杯やからね。栄養失調になってね、それでガリガリになってね、夜もね、毎晩、職場の問題を相談に来て、寝られへん。それが四日も続いたら、人間、どうにかなるで。まともな判断できないし、そのうち胃が食べ物を受け付けなくなつてね、血を吐いて。

組合としては、団交で、決着付けたい。会社は逃げ回つて団交に出てこん。地方労働委員会の後に、会社の弁護士が、「会社は、平坂と菊永がいる限りは団交に出てこん。」と言つたという話が伝わってきたりしてね。その間に会社は、被解雇者に、強引に、半分暴力的にはんこをつかせるんやからね、自分で辞めるんやつたらいいよ、違うからね。僕は、そっちの方を担当しておつた。そんな時に、「平坂と菊永についていくな。」というビラがまかれて、闘争委員会から追い出されたんや。僕らを追い出すということは、闘争態勢を解除する、首切りを認めるということやつたんや。すぐに首切り反対同盟を立ち上げたが、忙しくなつてね。七月に入ると、組合は解散して、組合執行部は消えてしもた。

帰郷、一九五四年

東京にもいかなあかんし、お世話になつたところに報告にいかなあかん、交渉もせなあかん、総評の第二次カンパが取り組まれていたが、それをどうするかという問題もあった。それと他の組合に脅しがかかってきたんや。会社解散したら退職金が出ないと、だから首切りを認めると、それが一番効いたん違うかな。首切り反対同盟の成果もあるよ。鳴尾とか、社宅がようけいあつたんや、債権者が黙つてないから明け渡せと、それを居住権を盾に、借家として住み続けた。借家人組合ができたりしてね。

平坂氏は、交渉とかあつて、尼崎を離れられん。菊永、お前、東京に報告と支援要請に行つて来いということになつてね。

体の調子は悪かつたけどね、それでも東京に行くことにしたんや。

当時の労働組合は、組合をやめたり、組合を解散したりしたら、世話はしてくれへん。東京の上部団体、鉄鋼連盟の事務所に行つても、何しに来た。「迷惑だ。」「帰れ」と、そんなんやつた。書記の人がここではあかんと言つてくれ、近くのすし屋の二階に泊めてくれてね、相談して、総評の高野実と連絡取つてくれて、大会のプログラムに入れてもらったんや。それで、総評大会で尼

鋼争議に全国からカンパをもらったお礼の挨拶をさせてくれと、総評の執行部の各単産、教員組合や、合化労連などに、頼んで回ってな、それが、一九五四年七月、第五回総評大会の平坂演説という話になりよった。

その時の大会は、高野派と太田派が主導権をめぐって対立しておって、あとでオリンピックで有名になる代々木の青少年会館が会場、舞台の右に太田派が、左に高野派が並んで、すごいもんやった。俺びっくりしたのは、太田薫は合化労連やけど、合化にも結構高野派は多かつたんや。平坂演説は、評判になって、ごつつう影響を与えたんやが、平坂氏は、有名な高野派で、高野派への支援演説だったんや。おれにしたら、なんでそんなに騒がれるんやと思っていた。

尼崎に帰って、報告したら、また血を吐いた。もうあかんと思っつて、その年の三月に親父も死んでいたんで、田舎に帰ることにして。

家に帰ったら、しばらくして、兵庫県警と鹿児島県警が来た。尼鋼争議で暴力事件で告発されておってな。

「警察や。」言うから、立ち上がるうと思っつても、立ち上がれん。はいあがつても、青い顔して、人間の顔やなかつたと思っつ。警察もこんな病人、当時は新幹線もないし、二十時間も汽車の乗せたら死んでしまふと思っつたんやろ、黙っつて帰っつて行きよった。定期的には、監視には来ていたようや。

都会も不景気やが、田舎はもっと不景気や。養蚕は壊滅、さつまいも、たばこ、都市の消費、工業に連動した農作物が全く売れっこない。畑にさつまいもが、カマス袋に入れられてさらされて、くさつて、ほうりだされておつた。畑を耕しても、大雨が降つたら土が流されて、堆肥から作り直し。こんなところで子供作つて育てられないと、若い女の人がどんどん都会に出て行つて、いなくなつてな。農家の跡取りにとつては、深刻な問題やわな。

若い農家の跡取りが、多い時には十二、三人集まつて、どうやつてたばこを売つて利益を上げるか、研究会をやつた。みな、俺と同じ世代や。当時は農地解放の影響で、農村にも民主的な雰囲気があつたんやな、真剣に議論したんやが、人件費、肥料などの材料費、運送費、売つた時の収入、仕分けをして、数字を出して、いくら計算しても利益が出てこん。展望は出てこんかつた。

二年ぐらい帰つていたんかな。